第26講 実践演習(5)

一 文章を読んで、次の問い（**問一～六**）に答えよ。（設問の都合で送り仮名を省いたところがある。）

東坡(注1)先生初官鳳翔(注2)日、遇一老僧。謂ⓐ之曰、「我有煅法(注3)、欲以相授。幸少憩我盧也。」坡語(注4)僧曰、「聞之、太守(注5)陳公(注6)嘗求而不与。A我固無欲、乃以見授、何也。」僧曰、「我自度老死無日。而法(ア)当伝人。然為之者、多因致禍。B非公(注7)無可授者。但勿妄伝貪人(注8)耳。」後陳公知坡得ⓑ之、懇求甚力、(イ)度不可不与。陳得而為之、不久C果敗官而帰。

（何遠『春渚紀聞』より）

（注）
1 東坡――人名。北宋の文人蘇軾のこと。
2 鳳翔――地名。
3 煅法――不老長寿の薬を作る方法。
4 坡――東坡を指す。
5 太守――郡の長官。

6　陳公――人名。
7　公――相手に対する敬称。
8　貪人――欲の深い人。

問一　傍線部ⓐ「之」・ⓑ「之」の指示内容の組合せとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

① ⓐ…老僧　ⓑ…煅法
② ⓐ…老僧　ⓑ…官
③ ⓐ…東坡　ⓑ…煅法
④ ⓐ…東坡　ⓑ…官
⑤ ⓐ…陳公　ⓑ…煅法
⑥ ⓐ…陳公　ⓑ…官

問二　波線部(ア)「当ニレ伝フレ人ニ」・(イ)「不ルヲレ可カラレ不ルレ与ヘ」の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア)　「当レ伝レ人」

① 誰(だれ)かに伝えておくこともできる
② 誰かに伝えてくれないだろうか
③ 誰かに伝えようとしたところだ
④ 誰かに伝えておかねばならない
⑤ 誰かに伝えておくかもしれない

(イ)　「不レ可レ不レ与」

① 与えないこともないというように
② 与えないわけにはいかないように
③ 決して与えてはならないように
④ 全く与えるつもりはないように
⑤ 与えたくてしかたがないように

問三　傍線部Ａ「我固(もと)ヨリ無キニレ欲スル、乃チ以テ見ラルルハレ授ケ、何ゾ也ヤト」の解釈として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。

① 私は煅法を伝えてほしいとはまったく思っていませんが、それなのにお教えいただけるのは、どうしてですか。
② 私の方は煅法を伝えようとはまったく思っていませんが、いまここで教えあおうというのは、どうしてですか。
③ 私はあなたに出会えるとも思っていませんでしたが、お住まいにまでお招きいただけるのは、どうしてですか。
④ 私はこれまで無欲を旨として暮らしてきましたが、それだけで煅法をお教えいただけるのは、どうしてですか。
⑤ 私は自分の煅法を伝えたいとは思ってもいませんが、あなたが教えてもらいたいと願うのは、どうしてですか。

問四　傍線部Ｂ「非レ公 無二可レ授 者一」を返り点に従って読み下すとどうなるか。最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。

① 公を非として授くを可とする者無し
② 公の非は授くべき者無からんや
③ 公を可とすること無ければ授者に非ず
④ 公に非ざれば授くべき者無し
⑤ 公に非ざれば授者を可とする無かれ

問五　傍線部C「果シテ敗リテレ官ヲ而帰ル」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 陳公が願ったとおり、陳公は官職から解放されて故郷に帰ることになった。
② 東坡が予言したとおり、陳公は官職から解放されて故郷に帰ることになった。
③ 東坡が心配したとおり、陳公は官職を失って故郷に帰ることになった。
④ 老僧が画策したとおり、陳公は官職を失って故郷に帰ることになった。
⑤ 老僧が語っていたとおり、陳公は官職を失って故郷に帰ることになった。

問六　本文の内容に合致するものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。

① 東坡は煅法を習得する目的で、はるばる鳳翔にまでやってきた。
② 老僧は陳公に煅法を伝えなかったことを、ずっと後悔していた。
③ 老僧は自分の死期が近づいたことを知り、東坡に煅法を伝えた。
④ 老僧は欲の深い人に煅法を伝えないよう、東坡に注意を与えた。
⑤ 陳公は様々な手段を用い、結局老僧から煅法を聞き出した。
⑥ 東坡は老僧との約束を固く守り、誰にも煅法を伝えなかった。

二　文章を読んで、次の問い（**問一〜六**）に答えよ。（設問の都合で送り仮名を省いたところがある。）

哀王沖（注1）、字倉舒、少聡察岐嶷（注2）。時ⓐ軍国多事（注3）、用刑厳重。太祖（注4）馬鞍在庫、而為鼠所齧。庫吏懼必死、ⓑ議欲面縛（注5）首（ア）罪、猶懼不免。沖謂曰、ⓒ「待三日中、然後自帰。」沖於是ⓓ以刀穿単衣、如鼠齧者、ⓔ謬為失意、貌有愁色。太祖問之、沖対曰、「世俗以為ⓕ鼠齧衣者、其主不吉。今単衣見齧、是以憂戚（注6）。」太祖対曰、「A此妄言耳。無所苦也。」俄而庫吏以齧鞍聞（注7）。太祖笑曰、「B児衣在側、尚齧、況鞍懸柱乎。」C一無所問。D沖仁愛識達、皆此類也。

凡応罪戮、而為沖微所弁理（注8）、頼以済宥（注9）者、前後数十。太祖数対群臣称述（イ）、有欲伝後（注10）意。年十三疾病（注11）、太祖親為請命（注12）。及亡、哀甚。文帝（注13）寛喩（注14）太祖、太祖曰、「E此我之不幸、汝曹之幸也。」

（陳寿『三国志』による）

（注）

1　哀王沖――三国時代魏（ぎ）の曹操（そうそう）の子、曹沖（そうちゅう）。

2　岐嶷――才知に秀でていること。

3　軍国――軍事と国政。

4　太祖――魏の曹操。

5　面縛――自ら両手を後ろ手に縛ること。罪に服する気持ちをあらわす。

6　憂戚――恐れ心痛める。

7　聞――申し上げる。

8　弁理――処理する。

9　済宥――救済し、罪を赦（ゆる）すこと。

10　伝レ後――後継者にする。

11　疾病――病気が重く危篤におちいること。

12　請レ命――死なないように祈ること。

13　文帝――曹操には二十五人の息子がいたが、その嫡男、曹丕（そうひ）のこと。この時にはまだ帝位にはついていないが、後に即位したので、ここでは「文帝」と記されている。

14　寛喩――なだめる。

問一　傍線部(ア)「首」・(イ)「称」と同じ意味で用いられている語として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア)「首」

①　部首　②　首位　③　斬首
④　首肯　⑤　自首

(イ)「称」

①　敬称　②　称賛　③　対称
④　称号　⑤　呼称

問二　傍線部A「此妄言耳。」とあるが、太祖はどのようなことを「妄言」とみなしているのか。文中の語句（波線部ⓐ～ⓕ）で答えるとすればどれか。最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

①　ⓐ　軍国多事、用レ刑厳重。
②　ⓑ　議欲二面縛首レ罪、
③　ⓒ　待二三日中一、然後自帰。
④　ⓓ　以レ刀穿二単衣一、
⑤　ⓔ　謬為二失意一、貌有二愁色一。
⑥　ⓕ　鼠齧レ衣者、其主不吉。

問三　傍線部Ｂ「児衣在ㇾ側、尚齧、況鞍懸ㇾ柱乎。」の解釈として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。

① 身近にあった子供の衣でさえかじられるのだから、いっそ鞍を柱に懸けておいたらどうだろうか。
② 太祖の衣が子供の傍らにあってさえかじられるのだから、いっそ鞍を柱に懸けておいたらどうだろうか。
③ 身近にあった子供の衣でさえかじられるのだから、鞍を柱に懸けておくべきではなかった。
④ 太祖の衣が子供の傍らにあってさえかじられるのだから、柱に懸けてある鞍がかじられるのは当然だ。
⑤ 身近にあった子供の衣でさえかじられるのだから、柱に懸けてある鞍がかじられるのは当然だ。

問四　傍線部Ｃ「一無ㇾ所ㇾ問。」の意味として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。

① いっさい責任を追及しなかった。
② すこしも疑いの余地がなかった。
③ すこしも聞きただすものがいなかった。
④ だれ一人として見舞うものがなかった。
⑤ だれ一人として怪しむものがなかった。

問五　傍線部Ｄ「沖仁愛識達、皆此類也。」とあるが、「此」は哀王のどのような行動を指すのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 自分の衣に刀で鼠がかじったような穴をあけてしまったが、鞍を鼠にかじられた倉庫番とともに進んで自分たちの罪を認めることで、かえって太祖を感嘆させたこと。

② 太祖の鞍を鼠にかじられたのみならず、太祖の衣にまで穴をあけてしまったが、忠義の心に厚い倉庫番の忠告を素直に聞き入れて謝罪し、太祖の我が子に対する期待に十分こたえたこと。

③ 太祖の鞍を鼠にかじられた倉庫番の身を思いやり、わざと自分の衣に穴をあけ鼠にかかわる俗信に対する太祖の反応を利用することによって、太祖の倉庫番に対する怒りをそらせ命を救ったこと。

④ 鼠が鞍までもかじらざるをえないことから倉庫の中の穀物が横領されている事実に気づき、わざと太祖の衣に穴をあけて太祖の関心を巧みに倉庫番に向けさせることによって、強欲な倉庫番をこらしめたこと。

⑤ 倉庫番の不注意から大切な鞍を鼠にかじられ、それを不吉の予兆だとする俗信にとらわれて失意にあった太祖の気持ちを察し、自分の衣にも穴をあけるという子供らしい機知によって太祖の笑いを誘って慰めたこと。

問六　傍線部Ｅ「此我之不幸、汝曹之幸也。」とあるが、ここで太祖が「不幸」・「幸」といったのはなぜか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 哀王が死んだことは、太祖にとっては優れた後継者を失ったことを意味し、文帝らにとっては有力な競争相手がいなくなったことを意味しているから。

② 哀王が死んだことは、太祖にとっては賢明な臣下を失ったことを意味し、文帝らにとっては平素は近よりがたい父をこの機会を利用してなだめえたことを意味しているから。

③ 哀王が死んだことは、太祖にとっては的確な助言をしてくれる人物を失ったことを意味し、群臣にとっては後継者が嫡男である文帝に決着し、争いに巻き込まれなくてすむようになったことを意味しているから。

④ 哀王の死に対して太祖がひどく悲しんだことは、太祖にとっては愛情に溺(おぼ)れたさまを群臣の前にさらすことを意味し、文帝らにとってはふだんは冷徹な父のみせた情愛にふれることができたことを意味しているから。

⑤ 哀王の死に対して太祖がひどく悲しんだことは、太祖にとっては一時的に後継者問題を的確に処理する能力を失ったことを意味し、群臣らにとっては文帝を後継者に推す絶好の機会が到来したことを意味しているから。

〈Memo〉

第26講　確認問題

① 「不レ可レ不レ語(つゲ)。」の解釈として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　告げないわけにはいかない。
イ　告げたくてしかたがない。
ウ　決して告げてはいけない。
エ　告げないこともない。
オ　全く告げるつもりはない。

② 「夫レ以二無知之禽獣一、猶且変レ勇為レ怯、況人之霊」の趣旨として、最も適切なものを次の中から選べ。

ア　禽獣は無知なものだが、霊長類である人間ならば、なおさら勇敢さが変じて卑怯になるなどということはないと夫は言ったのである。
イ　そもそも、知恵のない禽獣でさえ、勇猛だったものが臆病になることがあるのだから、まして知恵をもつ人間ならなおさらである。
ウ　夫と知恵のない禽獣とを比べるということは、勇敢と卑怯とを比べるようなもので、霊妙な人間というものがわかっていないのである。
エ　あの無知の禽獣ですら、しばらくは臆病から勇猛へと性格が変わったのだから、人の霊魂も少しの間なら変化することができるのである。
オ　それゆえ、士人は無知の禽獣の性格が勇猛でなくなっても大切にしたのだから、優れた人間ならなおさら大切にするであろう。

〈Memo〉

第26講　解答

一

問一　③　問二　(ア)④　(イ)②　問三　①

問四　④　問五　⑤　問六　③・④

二

問一　(ア)⑤　(イ)②　問二　⑥　問三　⑤

問四　①　問五　③　問六　①

〔現代語訳〕

一

東坡先生が初めて鳳翔の官吏になって赴任した日、一人の老僧に会った。(老僧が) 東坡に言うことには「私は不老長寿の薬を作る方法を知っていて、(あなたに) 授けようと思っている。どうかしばらく私の草庵に来て休憩してください」と。東坡が僧に話して言うことには、「これを聞いたことがあります、郡の長官の陳公様が以前 (不老長寿の薬の作り方を教えてほしいと) 求めたのに教えなかったと。私は (煅法〔＝不老長寿の薬を作る方法〕を) もともと伝えてほしいとは (まったく) 思っていませんが、それなのにお教えいただけるのは、どうしてですか」と。老僧が言うには、「私は自分で年老いて死期が迫っていることをわかっている。しかし道理として誰かに伝えておかねばならない。しかし、これを教えられた者は、多くそれによって不幸になる。あなたでなければ教えることのできる者はいない。ただむやみに欲の深い人に教えることはしないでおくれ」と。後に陳公が、東坡が煅法を得た〔＝教えられた〕ことを知って、熱心に教えてほしいと懇願するので、与えないわけにはいかないようになってしまった。陳公は (その作り方を) 手に入れ実行したが、まもなく (老僧が語っていたとおりに) 官職を失って (故郷に) 帰った。

二

哀王沖〔＝曹操の子である曹沖〕は、字は倉舒で、若くして才知に秀でていた。時に、軍事と国政がいろいろ騒がしく、刑罰を行うことが厳重であった。太祖〔＝曹操。哀王沖の父〕の馬の鞍が倉庫にあって、鼠にかじられた。倉庫番が必ず死刑になることを恐れて、自ら両手を後ろ手に縛り（罪に服する気持ちを表して）罪を自首しようとしたが、やはり（それでも）死刑を免れないことを恐れた。哀王沖が言うことには、「三日間（どこかに行って）待って、その後で自分から帰ってきなさい」と。哀王沖はそこで刀で自分の衣に穴をあけ、鼠がかじったようにして、偽って落ち込んだふりをして、不安な表情でいた。太祖がこの理由を問うと、哀王沖が答えて言うには、「世間では鼠が衣をかじったら、その衣の主は不吉なことになると（言われているそうです）。今、衣が（鼠に）かじられました、そういうわけで恐れて心を痛めているのです」と。太祖が答えて言うには、「それはただの俗信である。苦しむことなどない」と。その後すぐに倉庫番が（太祖の馬の）鞍が（鼠に）かじられたことを申し上げた。太祖が笑って言うには、「身近にあった子供の衣でさえかじられるのだから、柱に懸けてある鞍がかじられるのは当然だ」と。（そうして太祖は）いっさい（倉庫番の）責任を追及しなかった。哀王沖が思いやりにあふれ才知に秀でているのは、すべてこのようであった。

そもそも刑罰で殺されるところを、哀王沖にこっそり処理されて、それに頼って救済され、罪を赦された者が、数十人前後いた。太祖はしばしば家来たちに対して、（哀王沖のことを）称賛して話していて、後継者にしようと考えていた。（哀王沖が）十三歳のときに病気が重く危篤におちいり、太祖は自分で哀王沖のために死なないように祈った。（祈りが届かず結局哀王沖は）亡くなり、（太祖が）悲しむことこの上ない。文帝〔＝太祖の長男の曹丕〕が太祖をなだめると、太祖が言うには、「これは私の不幸〔＝優れた後継者を失ったこと〕であるが、お前たちの幸い〔＝有力な競争相手がいなくなったこと〕である」と。

第26講　確認問題　解答

〔解説〕

① 「不可不～」は、「～しないわけにはいかない」という意味の二重否定。よって、正解はア。

② 「夫レ」は「そレ」と読み、「そもそも」の意味。「～猶且～、況～」から「抑揚」の句法だと判断できる。「A猶且B、況C（をや）」＝「AでさえB、ましてCはなおさらだ」なので、正解はイ。ちなみに「猶」までの部分が「無知の（＝知恵のない）禽獣」で、それさえも、ということ。次に「変レ勇為レ怯」の部分は、返り点に従って詠むと「勇→変→怯→為」の順番となる。選択肢も利用すると、「〔勇敢・勇猛〕が変わり、〔卑怯・臆病〕になる」という解釈になる。

〔解答〕

①　ア　　②　イ